

この子供たち

(6)

イーディス・ウォートン作

松原至大訳

侯爵夫人の真珠

レンチ夫人はジニーを抱き上げて、得意の演技の身ぶり、そのぬれた頬を、自分の頬にあてていた。ジニーのオレンジ色の巻いた髪が、夫人の金髪にもつれていた。

「あのいやなやつが、おかあちゃんの大事な子に、なにをしたの。」ジニーの頭越しに、ジュディスをにらみつけながら、夫人が言った。「あんたのおかあちゃんに会いたって言ったら、あんたを鞭でたたいた、でしょう。どうしたか、おかあちゃんに言つてちょうだい。そしたら、あいつを……」

だが、ジニーの顔は、晴れやかであった。そんな質問に答えるよりは、自分の母親の姿に、すっかり気をひかれていたのであつた。レンチ夫人の胸に、大きな滝のように下がっている真珠の間に、まるっこい指をすべりこませていた。

「これ、みんなほんもの。ブランカは、そんなものかかって、言つてたわ——ほんものじゃない訳を知つてるのよ。だつて、ジョイスのよりも、倍も大きいんですもの。」

「ブランカが。まあ、ここにいたの。どこにさ。」

「スコープが、かぎをかけてしまったの。だから、出てきて、お目にかかれないのよ。でも、マーティンさんのお部屋で、オペラグラスを見つけて、それで見たら、とてもよく見えて、真珠のかんじょうができるって言つてたわ。でも、お

りてこれないかしら。ジョイスがこしらえたのと同じものを、あなたが持ってやしないか、知りたがっているのよ。だって、そうだったら、ジョイスは大急ぎで、別のを買うんですもの。」

レンチ夫人の額は、たちまちジニーと同じように、晴れ晴れとなった。夫人は吹き出しながら、唇をジニーの頬につけた。

「さあ、レニー、どうお思いになって。これでもこの子は、私のほんとうの、かわいい娘じやなくって。」

レンチ侯爵は、夫人の後から、よろよろしながら歩いてきた。うすい色のだぶだぶしたフランネルを着て、色のあせた高い帽子をあみだにかぶって、ぐんなりとだらしなく立たたまま、長い足と長い頭で、ぬつと夫人たちを見下していた。

「なるほど、ちがいない。帽子よりも、もっと高いところから出たような声であった。そしてそれよりも高い、くつくとという声をしたが、それは屋根の上の方へ消えて行った。」

夫人の笑い声がそれに加わって、更に高く舞い上って行った。夫人はジニーを抱いたままで、ベンチに腰をおろした。

「ジュデイスは、私たちが、この子をさらって行くとも思ったのよ、レニー。考えても御覧遊ばせ。あら、私、忘れていました。まだ御紹介いたしませんでしたわね——ロード・レンチ。こちらは、ジュデイス・ホキータさん。それからこの方は、ボインさんとおっしゃって、クリフのお友だち——そうじゃございませぬ、ボインさん。私の今の夫、侯爵——いいえ、そうじゃない——そうそう、ただ私の夫。それはそうと、ブランカはどこにいるの、ジュデイスさん。連れてきて下さいな。テリーもよ。かわいい子だわ。なんて言ったって、私はあの子たちの母親よ、ねえ。でなければ……まあいいわ。ブランカは、やっぱりきれいですか、ボインさん。あの子がもっと元気ですと、きつと私は、あの子をスクリーンで、ものにして見せますわ。ジュデイスは、もう私たちの役には立ちませぬわね、そうでしょう、レニー。あんまりお上品ぶってますわ、私、いつも言ってるのですが……」

「おや、来たよ。」と、侯爵がさえぎった。ジュデイスが、妹を呼んできたのである。ブランカの目は、母を見て、思いきり大きく開かれていた。まっすぐなその姿勢と足どりは、レンチ夫人の着ているものと宝石に感じた興奮とを、おしか

くしてはいたけれど。その後からは、スコープが来た。けんかをしにでも来たように、ヘルメット帽をかぶって、灰色の手袋をつけて、こうもりがさを、槍のように握っていた。

「まあ、ブランカ。大きくなったわねえ。まあ、べっぴんさんになったこと。でも、あんまりいばってよ。あなたはたしかにレディーよ。でも、そんなレディーではだめ。さあ、握手しましょう。そして私の新しい夫を、紹介してあげましょう。レニー、ブランカよ。以前クリフと私が結婚していた時分、テリーやジュディスといっしょに来て、よく泊って行った子ですよ。テリーはどこにいて、ブランカ。どうしていっしょに来ないの。あの子にも会いたい。」

「テリーは、今先生と勉強中よ。」ブランカはよそよそしく言った。その目は、きらびやかなレンチ夫人の姿から、少しも離れなかった。

「でも、テリーは、先生がいなくなつて、行かないよっていつてたの。」と、ジニーはするそうに、母の顔をのぞきこみながらあまえて言った。「ブランカのように物好きじゃないから、たれかさんが、義理の子供に会いに来るたんびに、出てなんか行けるものかつて、言つたのよ。」

レンチ婦人は、ポインといっしょに、また笑い出したが、夫人はたしかに不満だった。

「まあ。テリーの先生は、お行儀のことまでは教えてないのですよ。」
この時、スコープは、この一番小さな子をたしなめて、

「お聞きしていらっしゃるのですよ、ジニーさん。あなたは、もう大きいのですから、はっきりお答えしなければ。」と言った。

「いやよ、私、そうじゃない。パンとビーチがしなければ。」と、ジニーは言った。

「ビアトリスさんとアストールさんは、外国人です。」と、スコープはきびしく答えた。

「いいわよ、あなただって、そうよ、年をとつた紅鶴さん。あなただって、私たちのように、ほんとうのアメリカ人じゃないことよ。」

「ジニー、テリーは、そんなこと言いませんよ。」と、ブランカは、弟の味方をして、はつきりと言った。

だがジニーは、自分の母親の胸という安全地帯にいたので、とり合わなかった。そこで、ジュディスが言った。

「お行儀の悪い子は、今日ヨットにのせませんよ。おとうさんが、あなたには、特別そう言うようになって。ジニー、スコープにすぐおわびしないのなら、ナニーといっしょに、あなたは留守居かもしれない。」

「いいえ、おわびすることはありませんよ。私のかわいいジニーは、あやまることなんかないわ。このおかあちゃんと、それから新しいおとうさんといっしょに、ゴンドラにのるんですもの。」レンチ夫人は、勝ちほこったように言った。しかし表情に富んだジニーの顔が、急に変わった。母親の胸から脱け出して、すべるように、スコープのところへ行つて、あまえるように、灰色のもめんの手袋の手をおさえた。

「スコープ、私、いたずらじゃないわ。さうじゃないよ——だって、私、きたない古ゴンドラなんかのにりたくない。私、おとうさんのスチーム・ヨットにのりたいのよ。」

この早い取消しに驚いて、レンチ侯爵のきいきい声があった。

「ほほお——この子のいう通りだよ、全くね。この子は、お前の子にちがいないよ、ジニア。」これに答えて、夫人は快活をよそおいながら、

「私だって、今にスチーム・ヨットを買つて、クリフのぼろヨットのまわりを廻つてやりますよ、ねえ、あなた。」といつて、一座を見わたした。

「そうだとも。さあ、でかけよう。一つヨットをさがそうかな。」かの女の夫は、やさしい皮肉を言った。

「よござんすわ。私、自分でさがします。」夫人は縞の毛皮のついた襦袢をけかえして、立ち上りながら、気色ばんで言った。するとブランカは、夫人のそばによつて、おずおずと見上げて言った。

「とてもいいお服ね、ジニアさん。こんないいの、私、見たことがない。それは、おかあさんがよくおっしゃる、ロシア人のお店で買ったのじゃない。あの、初めてのお客には、売らないというお店で。」

映画スターは、やさしい笑いを見せた。

「まあ、利口な子ですこと。ええ、そうよ。でもね、あなたのおかあさんが、あのお店へ行って、いくら頼んでも、この型は、手にはいりません。なぜって、この服は、アナスタス大公が、わざわざ私のために、デザインして下さったもので、一つしか作らないというサインのついた、書き付けを貰ってあるのですもの。この肩のところ、裁ち工合を見てみようだい。」

ブランカは夢中になって、その細かな部分を調べた。夫人は黒貂てんのスカーフをかきよせて、得意になって見まわした。

「スチーム・ヨットなんか、欲しいと思えば、たれにだって買えます。けど、大公がデザインしてあげようとおっしゃる女の人は、数えるほどしかありませんからね。」

「さあ、行こうよ。」かの女の夫は、退屈して言った。夫人はむきなおった。

「では、さよなら、ジニーちゃん。この次ぎには、二千トンのお船で、むかえにきますよ。ああ、ちよっと、私のバッグを知ってて、レニー。私、子供たちにキャラメルを持ってきたのですけれど。」夫人は後うしろをむいて、宝石のついたバッグの中をかきまわした。二人の少女は、キャラメルと聞いて、うなだれてしまった。だが、煙草や紙幣がごちゃごちゃになって、はいっているバッグの中からは、小さいが光沢のよい真珠のついた金ぐさが表れた。

「さあ、ジニー、これをつけて御らんさない。ブランカに顕微鏡で見てもらって、あなたのおかあさんが持っていらっしやる、まがいものと同じか、どうか、聞いてちょうだい。」

そばのブランカが、青くなった。

「あら、私、あなたのが、まがいものだなんて言いはしません。こいつ、そんなことを言ったの。私、ただこう言っただけよ。あれがまがいものか、どうか、たしかなことはわからない。こんなに遠くってはって——」

レンチ夫人は、落ちついて笑った。

「ええ、私はね、あなたがおかあさんで見なれているから、これもまがい物と思ったんだと思いますよ。でもね、映

画のクエンたちは、まがい真珠なんか、身につける必要はないのよ。もしかして本ものを盗まれても、いつでもお代りが買えますからね。あんた、三度目のクリフ・ホキータ夫人に、そう言っただけなさい。そんなにびくびくしなくともいいわ——私、おこってやしないから。夫人は、バッグの中から、小さな包みを取り出して、

「はい、あなたに指輪を持ってきましたよ。これも、検査しても大丈夫」と、ブランカの手にわたした。

ブランカがうれしさに興奮して、引きちぎるように箱をあけると、ブリリアント型の小さなルビーがはいっていた。ブランカは

「まあ、ジニアさん。」といって、指にはめると、大急ぎで、ポケットの中に、箱をつっこんだ。

「私のおみやげは、セント・ストアなんかで買いはしませんよ。夫人は別れの手を振りながら言った。「さよなら、みなさん。またじきに会えるかもしれないわ。レニーと私は、リドーへ新婚旅行をするのよ。みなさんも、海水浴へ行くんでしよう。あそこは、八月になると、とても賑やかになるわ。スマートな方が、大勢、海水浴のテントをはってよ。メンディップ公爵が、私たちのおとなりで、テントを張りますよ。あの方は、レニーの親友。さよなら、ジュディス。ポインさん、リドー・パレスで御いっしょに、晩さんをいたしましょう。公爵に御紹介いたしますよ。ランチ侯爵夫人とおたずね下さいまし。」

夫人は、真珠と笑い声の渦の中に、消えて行った。後に残されたブランカとジニーは、スコープにうながされて「ファッションシー・ガール」号のランチをむかえる用意をしに、家の中にはいるまで、今もらった品に、心がうばわれていた。

子供たちが行ってしまつと、ジュディスは、しばらくの間、ポインと庭を歩いた。映画スターのいた間は、あんなにも引きしまつて、おとなびいてたジュディスの顔が、おちよぼ口の、子供のような、小さい丸顔にかわつた。

「やあ、やつとすみましたね。」ポインはこう言つて、ランチ夫妻を放り出しでもするような身振りで、巻煙草を投げ捨てた。

「ほんとに。」気のりのしない調子で、ジュディスは答えた。「ジニアさんは、別にどうと言うことはありませんのね。」

大きな声をしますけれど、それで別にどうというわけではありません。」ポインの驚きに気がついたのか、こう付け加えた。

「ええ、まあ、別にどうということがなくて、結構でした。けれど、言うことは、しやくにさわりますな。」

ジュデイスは、かすかに笑って、肩をあげた。

「私も、あなたよりも、ああいう騒ぎに慣れていません。七人の子供がいて、それに幾人もの親がいるものですから、しよつ中、たれかしら、なかでござたいたします。でもジニアさんは、見かけほど悪くはございません。」ジュデイスは、ここで口をつぐんだが、我慢ができなくて、心の重みをとりのけるかのように、また口を開いた。「でも、ブランカが、私へのおみやげを、横どりしてしまいました。おわかりになりました。あの子は、計画的でしたの。下におりてきましたのは——ジニアさんから、それをとるためでしたの。ブランカは、どんないやしいことでもいたします。」

ジュデイスの目には、子供らしい大きな涙の玉が、いっぱいであった。その一つは、頭を後に（うしろ）そらせて、自慢らしく次ぎのように言いおわらないうちに、頬を伝わって落ちた。

「私は、あんなもの、いりません。大きくなったのですから、あんなつまらないものは、気にかけませんの。でも、ブランカは、あの箱の上に、私の頭文字がついていたことを知っていたにちがいありません。大急ぎでそれを、あの子がかくしたのを、あなた、御存じじやございません。」

その翌日、ポインは、暑いヴェネトを通って、山地にはいる旅の間、ホキータ家の子供たちのことや、それに関係のあるいろいろな問題が、心をはなれないので、自分がどこへ、なにをしに行くのかわからなかった。

ポインが、友だちと過した最後の時は、幸福と安穩の中に終った。デッキから落ちたり、マストによじ登ったりしないように、スコープが一生懸命に気をくぼせた、元氣な子供の一団でいっぱいになって、賑やかだった新しいヨットが、急に存在の理由を持ってきたように思えた。クリフ・ホキータは、純白なヨット帽をかぶり、青サージの服を着て、家族の間を、慈悲深いジャイアントのように歩きまわった。ホキータ夫人が、白いヨット用のスカートにメリヤスのジャケツを着て、金髪を風になびかせたところは、前よりも若く見えた。そしてポインと若い先生とを中心に、押しあい、へしあい

のゲームをして、ほんとうの子供たちと「まま子」たちが、夫人につかみかかると、いかにも母親らしい、やさしさを見た。

この遊覧旅行も、初めのうちは、都合よく運ばなかった。下宿をでかける前に、レンチ夫人が侵入してきた間、二階にとじこめられていたバンとピーチは、お客にも会えず、おみやげも貰えなかったというので、ジニーに罰を加えようとした。テリーは初めから無関心で、いきりたったこのイタリア人には、かかり合わなかった。ジニーは怒ると、かなり強いし、その上に、本場の真珠のついた金の首飾りのこともあるので、この三人をとりしずめるには、ジュデイスも、少しは横面をたたかなければならなかった。結局ボインが口を出して、折角のお休みに、お留守居しなければならぬと言ったので、静まったのである。しかし一度「ファンシー・ガール」号のデッキにのぼると、一同は、すべてのいざこざを忘れてしまった。ちょうどその日は風が強くて、ヨットはゆれていた。それにピーチが、チップストーンに会えたらうれし涙で、晴れ着をよごしたり、ブランカとジニーが、レンチ夫人のおみやげを、船長からボーイに至るまで見せてまわったりして、ホキータ家の子供たちは、またもとの仲よしに返っていた。

(つづく)

* * * * *

幼児の教育 第五二巻 第十一号

定価金五十円

昭和二十八年十月二十五日印刷

昭和二十八年十一月一日発行

東京都中野区千光前町一〇

編集兼 倉 橋 惣 三
発行者

東京都文京区大塚町三十五

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町二ノ五

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

○本誌御購読について注文申込その他はすべて発売所フレーベル館宛願います